



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3599 号 2017.4.13 発行

障害者アートが靴や防災グッズに 商品化県コンテスト 最優秀に 2 作品

山陽新聞 2017 年 4 月 12 日



幾何学模様
をあしらった
安藤さん
考案の靴
永長さんが
デザインした
防災グッズのイメ
ジ

岡山県



内在住の障害者らが創作した絵画やアート作品をデザインとして取り入れ、商品化のアイデアを競うコンテスト（県主催）で、最優秀賞のグランプリに 2 作品が選ばれた。学生部門は川崎医療福祉大（倉敷市）の安藤潤さんが考案した靴、一般部門は永長さくらさん（兵庫県宍粟市）の防災グッズ。

安藤さんの靴は、ひもや金具のないスリッポン型スニーカーに、障害者がデザインした幾何学模様などの色柄をプリントした。名称は「ガラッポン」。色柄のバリエーションを増やし、多くの作品を生み出せることが評価された。

永長さんの防災グッズは、障害者が描いた花や動物のイラストを使い、非常食や飲料水のラベル、救急ポーチなどをデザインした。障害者のアートを防災活動につなげられるとして認められた。

コンテストは、障害の有無を超えて交流する県のプロジェクトの一環で初めて行った。県内の 8 福祉事業所を利用する障害者が作った 4 4 0 作品を特設サイトで公開し、商品化のアイデアを募集したところ、学生部門で 7 5 0 点、一般部門で 5 5 点の応募があった。

受賞作 1 5 1 点は同サイトで公開しており、県障害福祉課は「障害者によるアート作品の可能性が広がるよう、商品化を後押ししたい」としている。

「迷駅」乗り換え、健常者 1 分・車いす 1 7 分 保坂知晃 朝日新聞 2017 年 4 月 13 日

名古屋の表玄関・名古屋駅。2027 年のリニア中央新幹線開業を視野に、どんな形にしていくなか。23 日投開票の名古屋市長選でも重要なテーマになる。

「案内に従って進むと、車いすでは行き止まりになってしまうんですよ」

4 月上旬、名古屋駅の地下街を電動車いすで進む近藤佑次さん（31）の行く手を階段が阻んだ。「名駅はただでさえ『迷駅』と皮肉られています。障害がある人たちにとっては、より顕著です」と話す。

名古屋駅は JR と名鉄、近鉄、市営地下鉄、あおなみ線の計 9 路線が乗り入れる複雑な

構造。近藤さんが階段に突き当たったのは、地下鉄東山線から名鉄への乗り換えだった。
 電動車いすを利用している近藤佑次さん＝JR名古屋駅



東山線の改札のうち、エレベーターがある北改札口を出て、案内矢印に従って名鉄に向かうと階段に突き当たる。地下鉄の駅員に尋ねると、「来た道に戻って、エレベーターで地上にいったん出て下さい」。

回り道のうへ、信号もある。出発から約17分後、ようやく名鉄の西改札に着いた。一方、記者が階段を使い、乗り換えの最短ルートを歩いてみると、1分余りで着いた。

近藤さんが所属する障害者団体「愛知県重度障害者団体連絡協議会」は15年、名古屋駅内での乗り換え時間のほか、名古屋駅から隣駅や駅周辺の商業施設までの時間が車いすと徒歩でどのくらい違うのか、13ルートで調べた。

当時の設備で最も時間差があったのは「新幹線のりば→東山線伏見駅」の約17分30秒差。続いて駅内移動の「東山線→名鉄」の13分45秒差。このルートは徒歩だとわずかに1分18秒で、車いすルートの不便さが際立った。近藤さんは「車いすでは、どこに行くにも回り道になります」と話す。

西予の知的障害者施設元園長「版画詩どろんこのうた」 40年間の園生作品113点 / 愛媛 毎日新聞 2017年4月12日
 「版画詩どろんこのうた 生まれたてのこぼ」を手にする仲野猛さん＝愛媛県西予市宇和町卯之町で、花澤葵撮影

「ぼくは 力といのちをもやすんだ」――。版画に刻まれた、たくましく、ありのままの言葉が胸を打つ。西予市野村町の知的障害者施設「野村学園」の元園長、仲野猛さん（75）＝西予市宇和町卯之町＝が、園生が約40年前から取り組む版画詩の作品集「版画詩どろんこのうた 生まれたてのこぼ」(合同出版)を出版した。「人間のすばらしさの原点が詰まっている。無心の強さ、心の豊かさを学んでもらえたら」と話す。【花澤葵】



障害者雇用へ民間と連携 富岡市、6月から養蚕業展開 産経新聞 2017年4月13日

障害者の雇用促進が叫ばれる中、富岡市内の公共施設をベースに、民間企業が地域の障害者を雇用する養蚕業を開始する。先月31日には施設利用に伴う賃貸借契約が同市と結ばれた。岩井賢太郎市長は「障害者雇用で生産された繭が、富岡シルクとして出ていくことにストーリー性がある」と歓迎している。

今回の事業に手を挙げたのは、障害者雇用支援事業を行うサンクステップ(本社・東京都中野区、中村淳社長)。同社は横浜市の浦舟複合福祉施設に障害者がクッキーの製造販売を行う「よこはま夢工房」を立ち上げるなどの実績もある。

首都圏に続き、地方での障害者就労事業の展開を検討していたところ、新聞記事で富岡市の養蚕を知り、それを生かした事業としてターゲットを絞ったという。

事業所名は「とみおか繭夢工房」で、平成28年度で閉園した市立妙義幼稚園（同市妙義町中里）の跡地約3千平方メートルを利用し、6月から事業を開始する予定だ。雇用する障害者はハローワークなどを通じて採用する計画で本年度は5人程度、32年3月までに30人の雇用を目指す。

養蚕技術責任者には富岡製糸場で蚕の生体展示を行った元地域おこし協力隊の佐藤祐一さん（34）が着任した。中村社長は「地域で養蚕をしてこられた人たちにも教えていただきながら取り組んでいきたい」と話した。

同工房での繭の生産量は本年度が300キロ、30年度が1トン、31年度が3トンと順次増産する予定。冬季には桑の枝を活用した和紙作りにも挑戦する。

富岡市の養蚕農家と繭生産量は昭和43年がピークで、3010戸と1441トンだった。それが現在では12戸と5トンにまで激減している。

市では「施設だけでなく市民桑園の利用など基本的なことからお手伝いしたい。ぜひ繭の増産に貢献してほしい」と期待を寄せている。

災害時に障害者の支援強化を求める 社会福祉法人、熊本市長に／熊本

毎日新聞 2017年4月13日

知的障害者やその家族などでつくる社会福祉法人「熊本市手をつなぐ育成会」の川村隼秋会長らは11日、熊本市役所で、避難所への障害者用スペース設置など、災害時の障害者支援強化を求める提言書を大西一史市長に手渡した。

びほろあんぱん 人気じわり 障害者就労施設とパン店協力 地元産豚醤の風味香る

北海道新聞 2016年4月12日



ベーカリーほそかわと、ワークセンターびほろのコラボで商品化された「びほろあんぱん」

【美幌】町内の知的障害者の就労施設とパン店がタッグを組み、商品化した「びほろあんぱん」が甘党の間で静かなブームになっている。美幌産のしょうゆ風味調味料「美幌豚醤（ぶたしょう）まるまんま」を使った4月の期間限定品。まるまんまの風味とコクがあんの甘みを引き立て、もちもちのパン生地との相性も抜群だ。通年販売も検討中といい、美幌の新たな味覚として注目されそうだ。

まるまんまを開発した合同会社「びほろ笑顔プロジェクト」がスイーツでの活用法を模索。昨年末、ベーカリーほそかわ（西2北2）と、北海道療育園のワークセンターびほろ（美富9）に打診して実現した。

1個150円で、今月1日から同ベーカリーとJR美幌駅構内の物産館「ぼっぼ屋」で販売すると、口コミで評判が広がった。同ベーカリーでは1日約50個売れるヒット商品に。細川社長は「あんが確保できれば期間延長を考えたい」と話す。びほろの宮上憲之施設長も「町内で浸透すれば、あんを仕込む利用者のやりがいにつながる」と歓迎している。（嶋田直純）

<空き家を生かす!!>団地利用の分散型サ高住（上） 幅広い世代との交流魅力

東京新聞 2017年4月12日

老朽化が進んだ団地の空室を、サービス付き高齢者住宅（サ高住）に改装する取り組みが進んでいる。サ高住は、高齢者が集まって生活するのが一般的だが、団地の空室を改装

するため高齢者だけが生活するのではなく、幅広い年代のコミュニティーに高齢者が溶け込んでいきやすいのが特徴。東京と名古屋で始まった「分散型サ高住」といわれる新しい



形の住宅や地域を訪れた。（白井康彦）
サ高住に転居し、着付け講師を続けるなど生き生きと生活する落合美江さん＝東京都板橋区の「ゆいま～る高島平」で

東京都板橋区の高島平。分散型サ高住があるのは、高層マンションが林立する二十三区内の人気居住エリアのひとつ。駅から徒歩十分ほどにある都市再生機構（UR）の団地の一棟が、そのサ高住だ。十一階建て全百二十一室のうち四十二室が改装された。いくつかのフロアにまとまっているのではなく、各フロアに点在する。二〇一四年に

「ゆいま～る高島平」として入居が始まった。

この棟は築四十五年。高齢者向け住宅を運営する「コミュニティネット」（東京都千代田区）が、URと二十年間、部屋を借りる契約を結んでいる。部屋はいずれも約四十三平方メートルで、以前は家族向け2DKだったが、一人暮らしや夫婦のみの高齢者向けの、ゆったりした間取りの1DKや1LDKに生まれ変わった。全国各地から、頻りに視察者が来ているという。

サ高住は、六十歳以上を対象としたバリアフリーの賃貸住宅。一一年の高齢者住まい法改正で誕生した。高齢者向けの施設ではなく住宅で、看護や介護の事業所がテナントとして入居するのが一般的だ。入居者は家賃と共益費、利用したサービス費を払う。有料老人ホームと、入居待ちの多い特別養護老人ホームの隙間を埋める形で人気を集め、全国で二十一万户超が整備されている。

ゆいま～る高島平では、トイレや風呂に手すりが設けられており、室内に段差はない。安否確認や生活相談といったサービスも提供される。入居者には、携帯電話に似た形の端末が配布されている。緊急時にコミュ社のスタッフに連絡できる。

スタッフは昼間、隣の棟にある事務所に常駐し、生活相談や、病院、介護事業者の紹介などもする。夜間などの緊急時は、警備会社が対応する。

一五年六月に入居した一人暮らしの落合美江さん（70）は「ここを選んでよかった。子どもたちが遊ぶ声が聞こえてきますし、いろいろなところに行きやすくて便利です」とほほ笑む。

落合さんは夫とともに、二十年前に都内から栃木県那須町の一戸建てに引っ越した。しかし、十年後に夫が病死。愛犬も三年前に死に、寂しさを感じていたところ、このサ高住のオープンを知り、入居を決めた。

家賃は一人暮らしの場合、月九万円台。周辺の同じ程度の家賃のサ高住と比べると、かなり広めだ。落合さんは、安否確認などのサービスを利用しているが、その利用料や共益費と合わせても十四万円弱。「国民年金や遺族厚生年金で何とかやっています」と話す。

入居前は、もとからの住民と親しくなれるかどうか気にする人も多いが、落合さんは「団地に卓球クラブがあり、週に二回は幅広い年代の人たちと楽しんでいます」と笑う。着物の着付け講師をしながら、週に一回、世田谷区の大学のオープンカレッジにも出掛けて健康づくりを学び、充実した生活を送っている。

コミュ社広報室の村岡鮎香さんは「団地の自治会に入ってくださいよう、お勧めしています」と、サ高住の入居者が団地に溶け込めるよう気を配る。

<空き家を生かす!!> 団地利用の分散型サ高住（下） 地域の拠点施設も整備

東京新聞 2017年4月13日

古くなってきた集合住宅の空室を、サービス付き高齢者住宅（サ高住）に改装して活用する「分散型サ高住」。高齢者だけが集まって生活するのではなく、もともと団地に住んでいる幅広い年代の人たちの中に、高齢者が溶け込んで暮らしていく新しいタイプのサ高住として注目されている。十二日付の（上）で紹介した東京都板橋区の「ゆいま〜る高島平」を上回る規模の分散型サ高住「ゆいま〜る大曽根」の整備が、名古屋市北区で進んでいる。

地域の拠点施設になるスーパー跡地。見学者らが広さに驚いていた＝名古屋市北区山田で

「転居した後の暮らしのイメージが湧いてきた」。九月下旬に入居開始となる計画で改装工事が進んでいる団地を、高齢者たちが下見に訪れて声を弾ませた。

この団地は、愛知県住宅供給公社が管理する。改装されるのは、十一階建ての四棟のうち二棟に点在する計四十室だが、二〇一九年までに七十戸に増える予定だ。改装後は、高島平と同じく「コミュニティネット」（東京都千代田区）が運営する。



大曽根の建物は一九七三年の完成で、外壁などに傷みも見られる。老朽化した印象に輪をかけてのが、スーパーが二〇一二年に撤退してできた広さ約千平方メートルの空きスペースだ。看板などがそのまま残り、シャッターが下りている。県住宅公社は「有効活用が急務の物件だった。高島平の事例も参考にして分散型サ高住の計画にした」（賃貸住宅課）と説明する。

特徴となるのはスーパーの跡地千平方メートルを利用して整備される地域コミュニティー拠点だ。来年三月に開所する予定で、地域の資源リサイクル拠点となる「資源カフェ」やレストラン、物販コーナー、文化教室などが入る計画。就労援助などで障害者を支援するNPO法人「わっぱの会」（名古屋市北区）が改装の立案や完成後の運営を担当する。

資源カフェは、古紙や缶などのリサイクル資源買い取りセンターと喫茶店を併設。周辺住民が持ち込んだ資源ごみを、NPOの活動として圧縮などの処理を施し、リサイクル業者に販売する。その売り上げは運営費に充てられる。住民たちには、ごみを持ち込んだついでにモーニングを楽しむなどして交流してもらおう。わっぱの会の齋藤縣三（けんぞう）理事長は「高齢者や障害者が垣根なく働ける場にするとともに、世代を超えて地域住民が交流できる場にしていきたい」と意気込む。

コミュ社の関連団体が、昨年十一月から毎月一回、団地内や周辺でコミュニティー拠点についての説明会を開いており、毎回、二十〜三十人が参加している。「新しいサ高住でどのような暮らしができるのか」などと興味を持ち、県外から見に来る人もいるという。十二日も数人が、工事が始まったコミュニティー拠点となる空間の広さに驚きながら見学し、「夢が広がります」と話していた。

入居予定者は、夫婦か一人暮らしの高齢者。もともとファミリー向けだった3DKの部屋が、三タイプの1LDKに改装される。家賃は月七万円前後になる見通し。一人暮らしの場合だと、家賃と見守りなどのサービス利用料、共益費の合計額は十二万円未満となるという。（白井康彦）

自閉症者 見える世界は 諏訪 23日に体験会 信濃毎日新聞 2017年4月13日

自閉症者ら特有のものの見え方を疑似体験しようと、シミュレーター装置を使った視覚体験会が23日、諏訪市総合福祉センター「湯小路いきいき元気館」で開かれる。大阪大と東京大の研究グループが2年前に開発した装置。障害者の療育に取り組む一般社団法人「ワクワク・プロジェクト・ジャパン」（塩尻市）代表理事で言語聴覚士の原哲也さん（50）が「自閉症者が見ている世界を共有し、より良い支援につなげたい」と参加を呼び掛

けている。

原さんによると、自閉症者は知覚が敏感で、明暗が強調されて見えることがある。電車などの速い動きは不鮮明で、視野にノイズが交じってざらついたり、きらめきが見えたりもする。これらがストレスとなり、人混みでパニックになったり、急に大声を上げたりするなどの不安定な行動につながるという。

20年ほど前から県内で自閉症などの子どもを支援してきた原さんは、そうした子の親自身が、わが子が何におびえて多動になったり、突然耳をふさいで騒いだりするのか分からず、苦悩する姿に接してきた。「どんな世界が見えているのかを知ることができたら…」。

そう考えていた時、研究グループの装置開発を知ったという。

研究グループは、自閉症者ら22人に聞き取った情報を解析。2015年3月、ゴーグルのように頭部に装着して使う視覚体験シミュレーターを完成させた。風景のコントラストが強調されたり砂嵐状のノイズなどが現れたりする症状を疑似体験できる。

研究グループによると、近年、自閉症はコミュニケーション能力の問題ではなく、感覚機能や運動機能に原因があるとの研究結果が報告されている。体験会に参加する予定という、グループメンバーで大阪大大学院工学研究科の長井志江（ゆきえ）特任准教授（42）＝ロボット工学＝は「研究が多くの方が自閉症を正しく理解する一助になればうれしい」と話している。

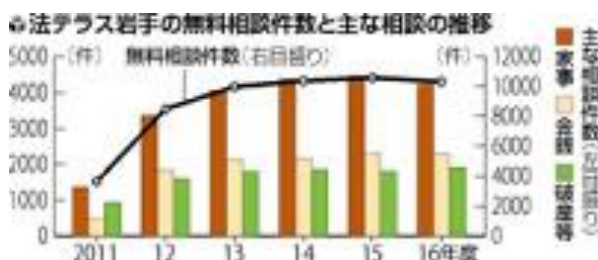
体験会は午後1～5時。長井さんの講演もある。参加費3500円。申し込みは名前、住所、連絡先などを明記し、電子メール（green@snow.email.ne.jp）で。

法テラス相談1万319件

読売新聞 2017年04月13日

16年度 震災後初めて減

日本司法支援センター岩手地方事務所（法テラス岩手）は12日、2016年度に受けた無料法律相談の件数を発表した。総数は1万319件で、14年度から3年連続で1万件を超えたが、東日本大震災後、初めて前年度より減少した。法テラス岩手は、震災から6年が経過す



中、震災関連の訴訟や土地に関する相談などがピークを越えたとみている。

県内には、盛岡市と宮古市に事務所があるほか、震災後に大槌町と大船渡市に被災地臨時出張所が開設された。無料法律相談のほか、被災者や生活困窮者を対象に弁護士費用の立て替えも行っている。

相談の内訳で最も多いのは、離婚や相続、遺産分割などの「家事」で、4221件と全体の40%を占めた。これに、損害賠償や貸金の請求などの「金銭」2278件（22%）、自己破産や特定調停などの「破産等」1911件（18%）が続いた。

「不動産」は1075件（10%）で、ピークだった13年度の1165件から減少が続いている。当初は、津波により「土地の境界が分からない」「権利書がなくなった」などの相談が寄せられていたが、現在は落ち着いたという。

一方、弁護士費用の立て替えなどを行う代理援助は1183件。このうち震災に起因するものは22件で、12年度の74件から大幅に減った。

代理援助の内訳は、労働上の損害賠償請求や賃金未払い、パワハラなどの「労働」が24件と、前年度の10件から2倍以上に増えた。大手広告会社・電通の過労自殺問題が注目され、労働者の権利意識が高まったとみられる。

法テラス岩手は、外出が困難な高齢者や障害者らを対象にした出張法律相談も行っており、活用を呼びかけている。問い合わせは法テラス岩手（050・3383・5546）

へ。受け付けは平日午前9時～午後5時。

＜多賀城市＞山形の5法人福祉避難所に

河北新報 2017年4月13日

宮城県多賀城市は22日、福祉施設を運営する山形県内の5法人と大規模災害時の施設利用協定を締結する。宮城県内の全体が被災する規模の災害時に、福祉避難所として市内の高齢者や障害者らを受け入れてもらう。

東日本大震災を教訓に市はこれまでに宮城県内の25法人81施設、山形市と山形県大江町の2法人5施設と福祉避難所の利用協定を結んだ。広域避難の選択肢を増やすため、友好都市の天童市の仲介で5法人10施設を加える。

新たに協定を結ぶのは社会福祉法人の山形県玉葉会（天童市）、天童福祉厚生会（同）、羽陽の里（同）悠愛会（山形市）、医療法人社団の悠愛会（同）。天童市役所で22日、協定締結式がある。

緊急時に病気、障害伝えられない... 取手市が「ヘルプカード」配布

東京新聞 2017年4月13日

取手市が配布する「ヘルプカード」

取手市は、手助けが必要なのに、病気や障害で周りに思うように意思が伝えられない市民のため、あらかじめ手伝ってほしいことを記載しておく「ヘルプカード」を17日から配布する。市は、緊急時にカードを所持していることで、本人や家族の安心につながるとしている。

（坂入基之）

カードにある「人工透析をしています」「パニックになることがあります」など

の欄にチェックを入れて相手に自分の状態を知らせ、不自由なことも記入しておく。その上で、「書いてある情報を音読して」「移動の際、介助して」など、お願いしたいことを伝える。

日常生活のほかにも、突然の発作に襲われたり、パニックになったり、災害で避難したりしたときにも使える。

デザインは、先行して導入した東京都のカードを参考にした。大規模災害時、市や県境を越えて避難しても、広く分かってもらえるよう配慮したという。

市は、病気や障害に対する地域の理解が進むきっかけになれば、と期待を寄せている。

ヘルプカードは、難病や身体・知的障害などで支援が必要な市内の約五千人を対象に、希望者に配布する。市障害福祉課、藤代庁舎総合窓口課、市内の障害福祉サービス事業所で受け付ける。

問い合わせは市障害福祉課＝電0297（74）2141＝へ。

介護の月給 約29万、障害は約30万円 2016年厚労省調査

福祉新聞 2017年04月12日 編集部

介護保険の処遇改善加算を取得した事業所で働く常勤介護職員の平均月給が、2016年9月時点で28万9780円となり、前年より9530円上がったことが3月30日、厚生労働省の調査で分かった。加算を取得した事業所は1・5ポイント増の90%。厚労省は「施設の経営努力により処遇改善は着実に進んでいる」と分析している。

調査は16年10月に特別養護老人ホームや訪問介護事業所など1万577カ所を対象に実施。有効回答率は76%。次の介護報酬改定の議論の基礎資料となる。

給与の引き上げ方法（複数回答）は定期昇給が70%で最も多く、手当が30%、賞与が15%。賃金水準の引き上げは16%にとどまり、基本給の上昇幅は2790円だった。時給で働く非常勤介護職員の上昇幅は10円。

加算を取得しなかった事業所は10%。理由は（複数回答）「事務作業が煩雑」「利用者負担が発生」「対象の制約（介護職員に限定）のため困難」が多かった。さらに掘り下げて聞くと、事務作業が煩雑では「加算取得の届け出を行える職員がいない」、対象の制約では「公平性を保つため他職種の賃金も改善しなくてはいけない」などの回答があった。

15年度新設の加算1.を取得した事業所は70.6%で、前年から4.1ポイント増えた。

調査結果は31日の社会保障審議会介護給付費分科会などに報告され、委員からは加算の効果が出ていると評価する見方が多かった。

政府は17年4月から、ニッポン1億総活躍プランに基づき、さらに1万円相当の処遇改善を行う。勤務年数による昇給制度の整備などが要件となっている。

障害福祉事業所も改善

厚生労働省は3月30日、障害福祉サービス従事者の平均給与が2016年9月は29万7069円で、前年同月に比べて1万3807円上がったとする調査結果を公表した。対象事業所の8割は給与増の原資となる処遇改善加算を取得している。

給与の引き上げ方法（複数回答）は「定期昇給」が67%、「手当での引き上げ・新設」（29%）などが多い。全国1万1787事業所を調査し7756事業所から回答を得た（有効回答率66%）。

福祉のコンビニ、プレオープン 大阪府庁別館1階 大阪日日新聞 2017年4月13日



大阪府内の障害福祉施設が作る弁当などを販売するアンテナショップ「福祉のコンビニ・こさえたん」が12日、府庁別館1階にプレオープンした。木のぬくもりを感じさせる店内に手作りのパンや雑貨が並び、買い物を楽しむ客の姿が見られた。プレオープンは13日までで20日に本格開業する。

プレオープンを迎え、商品を紹介する南谷さん（右）ら＝12日午前、府庁別館

府本庁舎で営業していた障害福祉施設のパンの販売店が3月末で営業を終了したことに伴い、

別館に移転して衣替えをした。府の公募と審査を経た30施設が参画。障害福祉施設の製品の愛称「こさえたん」を店名にした。

広さ36平方メートルの店内には、天然酵母のレーズン食パンやマーマレードなどの加工品のほか、手すきのブックカバー、マグカップなどの雑貨もそろえる。

羽曳野市の障害福祉施設「古市ひまわり園」の利用者で、レジ打ちの就労体験に臨んだ南谷達也さん（31）は「販売することができてうれしい」と話した。

